International Congress on Analytical Sciences —ICAS ‘91—
Joint and Satellite “KITAMI” CONFERENCE 開催の思い出

厚谷 郁夫

私が北海道分析化学会支部会員になったのは 1971 年４月、北見工業大学に赴任した年からですから私にとっては丁度 35 周年となるわけです。日本分析化学会員としては 46 年間、半世紀近い年月を一応分析化学研究者として過ごしてきました。

1971 年の赴任当時、北大では故神原富民先生、故藤本昌利先生をはじめ多くの先生がご活躍なさっておられ、室蘭工大では故室住正世先生が質量分析の分野で輝いておられたのを感銘深く記憶しております。私の研究分野は原子吸光分析、プラズマ発光分光分析などでしたから、道内の研究者との交流はほとんどなく、東京で開催される学会、研究会に出席していましたが、出席するたびに「北見ってどこですか」と聞かれ、「網走から南西に　約 55 km、車で 1 時間程度のところです」と答えると、「網走からですか、*よく出てきましたね、大変ですね*」と何人もの方々に言われると、内心「*刑務所から出てきた訳ではありませんから*」と思いつつ、可笑しさと僅かに切なさを感じたものです。

1978 年第 39 回分析化学討論会が北見工大で開催されて以降は上記のような質問はなくなりましたが、私は 1986 年北海道支部幹事になるまでは北海道支部とは関係が薄く、1988 年「分析化学」の編集委員を担当してから支部の行事にも参加するようになりました。

さて分析化学・分光分析の研究者として、私は常に‘感度向上’が最大のテーマでした。特に原子吸光分析の感度向上が私の中心テーマでしたから、原子吸光分析法で固体試料の直接定量が可能になれば、固体試料を溶解して測定するより、少なくとも 100 倍の感度向上が可能になるし、溶解、希釈などの操作も省けるので迅速かつ誤差要因が少ないので正確度も増すと考えていました。しかし最大の問題はバックグランド補正と固体・粉末試料の導入方法でした。丁度その当時、1980 年、小泉英明現分析化学会会長が日立製作所でゼーマン効果を用いるバックグランド補正法を確立され、世に問うたときでしたから、私は早速この装置を使用して、試料導入方法としてはミニチュアカップ方式を考案して固体・粉末試料の直接定量の実用化を可能にしました。固体試料の直接定量については 1986 年、ドイツ、ヴェツラーで第 1 回国際会議が開催され、私は 1988 年第 2 回国際会議から 1996 年第 5 回まで Scientific Committee のメンバーとして参加いたしました。

そのような関係にあったので、北見で 1991 年 9 月 2 日～4 日- ICAS‘91- Joint and Satellite “KITAMI” CONFERENCE : New Approaches in Trace Element Analysis by Atomic Spectroscopy を開催することになりました。

文部省の予算がついて、地方都市で国際会議を開催するのは非常に珍しく、北海道新聞、読売新聞などで地方版とは言え大きく取り上げて、’成功した国際シンポ‘という評価をあたえてくれました。

ICAS’91 は仁木栄治先生（委員長）、不破敬一郎先生（副委員長）、合志陽一先生（組織委員長）が中心になって開催され、Satellite Conference　は九州大学と北見工業大学で開催されました。その当時、北見と言っても本州の人にとっては北海道のどの辺りにあるのか良

くは分からない人が多かったのですから、外国人にとっては“Kitami” city と聞いても皆目見当がつかなかったと思います。しかし外国人の参加数 20 人を数え、文部省の支援条件を満たすことができ、Journal of Analytical Atomic Spectrometry, (Dec.1991, Vol.6 p587)に John G. Williams が、また Fresenius' Journal of Analytical Chemistry（Editorial p.A9）には M. Grasserbauer がそれぞれ Conference Report のかたちで IUPAC International Congress on Analytical Sciences 1991 に関する報告記事を載せ、Kitami Conference についても好評してくれたのを憶えています。

Kitami Conference が成功した要因は、
第 1 に池田重良先生、不破敬一郎先生、戸田先生、合志陽一先生、広川吉之助先生、原口紘炁先生、河口広司先生等等国際的にご活躍されていた多数の先生方に委員として名前を連ねていただけたこと、第 2 に原口先生をはじめ中原先生、北川先生、岡本先生など国際的な人脈を持つ先生方に Conference の実務・運営にご協力頂けたこと、第 3 に平林真北見工大学長、故久島北見市長など、大学、北見市の全面的かつ多大なご協力を頂いたことが Kitami Conference 成功の真の要因であったと思います。

現時点で、北見で国際会議を開催するのはそれほど大変な仕事ではないかもしれませんが、15 年前の時点では結構大変な仕事であったことは事実であり、協力して頂いた諸先生はもとより親身になって献身的にご協力頂いた大学関係者の方々にこの場を借りて改めて感謝申し上げ、分析化学会における私の最大の”思い出“を閉じさせて頂きます。

（オホーツク地域振興機構理事長）
（北見工業大学名誉教授）